



センター試験出願

大学入試センター試験の出願が迫っている。今年は9月30日(月)～10月10日(木)が出願期間である。3年生はすでに願書を書き、受験料の振り込みを終えた。校内での最終チェックの後、秋休み後に学校でとりまとめて発送する予定である。センター試験までおよそ17週。いよいよ本格的に受験が始まる。

55期生が受験するセンター試験は、来年1月18日(土)・19日(日)の2日間で実施される。本校の出願者は、鹿児島大学会場等で受験する予定だ。センター試験は、全国で50万人を超える受験生が受ける試験である。国公立大学入試の一次試験としての役割のほか、私立大学入試等にも利用されている。大学や学部学科によって必要な科目や配点が異なるので、事前調査が必要である。1・2年生も、全クラスの本棚に並んでいる『蛍雪時代』を手にとり確かめてみよう。

「静」の後期 進路研究を深めよう!

— 1・2年生 —

学校行事の多かった「動」の前期が終わり、10月からは落ち着いて学習に取り組める「静」の後期が始まる。後期の1年生の課題は「文理コースの選択」、2年生の課題は「志望校の決定」である。

1年生にとって、文理選択は高校入学後初めての進路に関する大きな決断になる。自分自身が納得した選択ができるよう、自分から保護者や先生方、上級生のアドバイスをもらいに行き、進路研究を十分に深めよう。他にも、『キャリアプランニングノート』24頁以降をよく読み、また、81頁のワークシートも活用してほしい。文理選択に関する思考を文章化し、目に見える形にすることは有効な方法である。

2年生の秋は志望校を絞り込む時期になる。志望校を決めるのはまだ早いと思っている人もいるかもしれないが、「将来の夢」や「行きたい大学」など、明確な目標を見つけることは、学習意欲の向上につながる。また、東進ハイスクールのHPでは、『大学入学共通テスト』と『センター試験』では、問題を解くためのベースとなる知識は変わりません。ただし、より高い『思考力・判断力・表現力』を必要とする進化し

た試験です。求められる能力は「変わる」というより「増える」といえるかもしれません。」と説明されている。求められる能力が増えるのだから、志望校をいち早く決定し、準備期間を確保しよう。

セルフティーチング

繰り返し復習することの重要性は皆がよく知っている。しかし、この「繰り返し」という言葉を、単なる「解き直し」と理解している者が多い。「何度も繰り返したのに定着しない」ことの原因が、ここにある。理解があやふやなまま、漫然と反復練習を積んでも、その解法や知識を応用させることはできない。

本当に意味のある復習のポイントは2つ。「説明」、そして「発声」である。

①計算問題のポイントを「自分に説明する」(数学・理科)

理系科目の復習を積む上で大事なことは、「どのポイントに着目すれば、答えを出すことができるか」ということ。解き始める前に、例えば、「この問題は、面積比を線分比として計算すること!」と、実際に声に出して説明した後、手を動かして「解法の再現」に取り組んでみよう。

②読解問題の解答根拠を「自分に説明する」(英語・国語)

英語や国語の復習のポイントは、「解答根拠が説明できるかどうか」ということ。例えば、記号問題の正誤に一喜一憂するのではなく、「この設問の解答根拠は、本文のこの部分(指をさしながら)で、itがさらにこの部分を指しているから、この設問の解答は、エ!」と、声に出して説明してみよう。英語や国語は、文章の内容が変わっても、「試される力」は「抽象化」「因果把握」「対立把握」の3つだけである。

③人名・出来事の背景を「自分に説明する」(社会[歴史])

大事なことは、「人名・出来事の背景をどれだけ理解しているか」ということ。そのための方法が『逆]一問一答。例えば、「享保の改革の後、商人の力を利用して幕府の財政を立て直そうとした老中は誰ですか?」という問いに、「田沼意次」と答えるのが一般的な一問一答ですが、「田沼意次」という言葉を見て、「享保の改革の後、商人の力を利用して幕府の財政を立て直そうとした老中である」と自分の言葉で説明してみる。難易度は高いが、用語一語一語に対する理解は確実に深まり、また記述問題への対応力も飛躍的に向上することだろう。

【参考: <http://www.ring.brigh10.jp/column/column-8755/>】

高卒：39.3%，短大卒：41.5%，大卒：31.8%

1年6組 担任 鈴江 耕太

さて何の数字でしょう？答えは、「就職した人のうち、3年以内に離職した人の割合」です。今回は職業や企業の選択に関するお話です。

農業科や商業科・機械科などの生徒で就職を希望する人は、9月から高卒採用試験に臨みます。試験開始が9月ですので求人票（各企業から届く、仕事内容や給料・休暇の設定などが書かれている用紙）が学校に届くのはもっと前、7月上旬です。（下図参照）

さらに言うと、昨年度までの求人票は学校に残っているので、3年生になれば4月～6月末までにその求人票からある程度絞り込みを行っておかないといけません。高校のわずかな時間で今後何年も働く（かもしれない）先を自分で決定しなければいけないのです。

※『高卒就職の流れ（イメージ）』



就職が早く決まった生徒が早期退職することもありますし、悩み続けた生徒が辞めずにうまくやっていることもあります。離職の理由も様々ですが、「思っていたのと違った」「やりたいことが他に見つかった」というのがやはり多い印象です。

ここまで読んで・・・「自分は大学に行くからそんなこと言われても」と言いたい？
じゃあその大学はどうやって選ぶの？

なんの将来的なビジョンもなしに大学に行くの？

職業は大学生になってから真剣に選べばいいと思っているの？

それでは（うまくいかなかった生徒と）同じ事になってしまいますよ？大卒でも32%だよ？

「離職が絶対に悪い！」、と言っているわけではありません。「思っていたのと違った」は労働環境など仕方がない部分もあるでしょう。しかし、「やりたいことが他に見つかった」はもしかしたら就職する前に気づけたことかも、と考えればどうでしょう。

進学だって同じです。本当に自分がやりたいことは何なのか。どの大学で勉強して、どの職業に就いて、どんな生活が送りたいのか。そのために高校ではどんな勉強が必要なのか。理系なのか文系なのか。そもそも自分はどんな性格でどんな性質を持っているのか。もう一度自分を見つめて、考えるべきは今なんです。悩むべきは、今なんです。

「光陰矢のごとし」

2年8組担任 野村 礼

前期が終了し、まもなく後期に入ります。前期は「動」、後期は「静」と言われています。これからじっくりと腰を据えて文武両道に励むこととなります。

9月6日に行われた体育祭では、他学年を全く寄せ付けない圧倒的な力で競技の部優勝を飾りましたね。応援団を中心とした56期生の見事な団結力に感動し、その勇姿に頼もしさを感じました。1年次の体育祭は上級生の力に圧倒されていました。この1年で皆さんがかなりの力をつけてきたことが分かります。しかし、何か特別なことをしてきたわけではないと思います。決して目には見えない日々の努力の積み重ねが、体育祭での目に見える「結果」となって表れたのだと思います。

さて、2年生の前期が終了したということは高校生活の半分が終了したということです。まさに折り返し地点です。あっという間だったと感じる人が多いのではないのでしょうか。残りの高校生活はさらに短く感じますよ。卒業するときには本校生が決まって口にする言葉がそれです。「光陰矢のごとし」という言葉があります。「光」は「日」、「陰」は「月」を意味し、「光陰」で「月日」を表しています。「月日が経つのはあっという間で二度と戻らないので、無為に送るべきではない」という戒めを含んでいます。古来使われてきた言葉で、それだけ人々の実感がこもったものであるということです。

ところで、無為に日々を過ごさないためにはどうすべきなのでしょう。答えはひとつではありませんが、私は「目標をもって行動すること」だと答えます。大きな目標（夢）を達成するために、小さな目標を立て実行していく。授業を漫然と受けない、宿題をこなすだけにしないということです。部活動も同様です。今為すべきことは何かを自分で考えて実行してください。日々の生活がきつくとも楽しいものとなります。あっという間にやってくる受験生としての日々も「勉強が楽しい」と思えるようになります。自分が成長しているのが手に取るように分かるのですから。

「高校生活はあっという間だった」という言葉は、無為に日々を過ごしてきた人には後悔を伴ったものとなり、充実させた人には満足感を帯びたものとなります。1年半後、果たして皆さんはどちらの意味で使うのでしょうか。ぜひ、後者の意味で使えるような日々を送ってください。

～気張いやんせ56期生～ ダメもとでチャレンジ？

56期生が2年生になって半年が過ぎようとしている。全員が全力で戦った体育祭では、競技の部で1・3年生に大差をつけて優勝することができた。体力的に一番優れている学年だからとはいえ、絶対優勝してやるという気持ちの面でも、全然負けていなかったのが結果に表れたのだと感じた。

その11日前に、学年の先生方や教科担の先生方で56期生の進路検討会を開き、全員の成績と進路志望を検討した。現在の時点で、不可能だと言うつもりは毛頭ない。本人の本気度を担任の先生から伺った。中には、ダメもとで頑張ってみるといっている人もいる。でも、このダメもとという言葉の裏には、失敗しても当たり前という気持ちが隠れているように感じる。人生何が起こるかわからない。だから、成功を信じて精一杯頑張るのが今できることである。ダメもとという逃げ道を作らずに、絶対成功して見せると気持ちの面でも負けずに努力してほしい。ましてや、合格できそうな大学でいいなどといっている56期生、ポーっと生きてんじゃねーよ！〇〇〇に叱られますよ。(文責 塘)

体育祭も終わり、残す大きな行事も南薩路遠行のみとなった。これを読んでいる頃は、センター試験の出願準備も終え、いよいよ本格的に受験が始まったことを実感しているところだろう。秋休みが終わって後期が始まれば、すぐにセンター試験まであと100日のカウントダウンが始まる。3年生は、この目前に迫った受験に対して、どういう戦略で臨もうとしているだろうか。

ここで、有名な孫子の一説を贈りたい。

知彼知己 百戦不殆	(彼を知り己を知れば百戦 ^{あやう} 殆うからず)
不知彼而知己 一勝一負	(彼を知らずして己を知れば 一勝一負す)
不知彼不知己 每戦必殆	(彼を知らず 己を知らざれば 戦う毎に必ず殆し)

Wikipediaによると、

『孫子』は、紀元前500年ごろの中国春秋時代の軍事思想家孫武の作とされる兵法書。武経七書の一つ。古今東西の兵法書のうち最も著名なものの一つである。紀元前5世紀中頃から紀元前4世紀中頃あたりに成立したと推定されている。

『孫子』以前は、戦争の勝敗は天運に左右されるという考え方が強かった。孫武は戦争の記録を分析・研究し、勝敗は運ではなく人為によることを知り、勝利を得るための指針を理論化して、本書で後世に残そうとした。

とある。単に戦争に勝つための戦術書としてだけでなく、いかに国を強くするかという視点で書かれていることから、広くスポーツやビジネスの世界でも参考にされている。

受験において、この孫子の兵法をどう解釈すればいいだろうか。

「彼を知る」は、戦争において敵の実情を知ることである。受験においては、志望大学の試験科目や配点、試験時間等を知る、ということになるだろう。いまだに赤本を手にとっていない人はいないと思うが、自分の第一志望校の試験内容をどの程度把握しているだろうか。

例えば、試験時間が何分で大問数がいくつかが分かれば、大問1つをどのくらいの時間配分で解けばいいのかが分かる。こういうことを知らずに二次対策をしても効果が薄れる。

「己を知る」は、戦争において味方の実情を知ることである。受験においては、自分の力を客観的に把握する、ということになるだろう。模試を受けて、単に点数が良かった悪かった程度の反省しかしていない人はいないと思うが、模試の結果をどの程度分析しているだろうか。

目標に届くためにあと何がどのくらい必要か、が分かれば、これからの少ない残り時間に何にどのくらい時間をかけて対策していけばよいかが見えてくる。この認識がなくて、ただがむしゃらに努力しても目標には届かない。

受験戦争という言葉があるように、「勉強しかできない人は仕事では使えない」というような受験の弊害が強調されることがある。しかし、目標を的確に把握し、自分の力を正しく認識して、何にどのくらい努力をするのかの戦略を立てるという意味では、受験は「生きる力」に直結する。ただ受け身で授業を受けるのではなく、「まず宿題からやる」というような意識で課題をこなすのではなく、自分なりの戦略をもって残りの受験勉強をやりきってほしい。